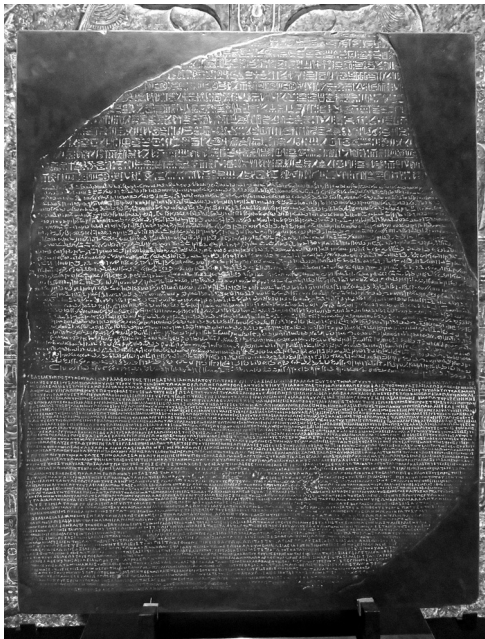


## 国立民族学博物館の収蔵品⑪

# 古代文明と文字



インダス文明の印章（複製）[H0114969]



ロゼッタ石の碑面（複製）[H0037549]

「文明のゆりかご (cradle of civilisation)」という言葉を知っているだろうか。古代文明の発祥の地のことを総称する呼び名なのだが、いまひとつ知名度が低い。一方で、日本でよく知られている類似概念として、「世界四大文明」というものがある。かつて学校教育でも聞いた覚えのあるもので、ナイル川沿いのエジプト文明、チグリス川・ユーフラテス川沿いのメソポタミア文明、インダス川沿いのインダス文明と、黄河・長江沿いの中国文明の、合わせて四つの文明のことを指す。これらの古代文明には共通して、都市、階級制度、文字、そして国家があったという。

繰り返しとなるが、四大文明の共通点として「文字」の使用が挙げられている。エジプト文明にはヒエログリフなどの文字があり、エジプト語を書き表していた。象形文字であるヒエログリフは、二つの言語（三つの文字体系）でのパラレルテキストが刻まれたロゼッタ石の発見によって解読されたことで有名である。

メソポタミア文明の文字はいわゆる楔形文字と呼ばれるもので、シュメール語、アッカド語など様々な言語を書くのに用いられている。図像が抽象化されてシュメール楔形文字になる以前には、ウルク古拙文字と呼ば

ばれる象形文字も存在した。『ギルガメシュ叙事詩』も楔形文字で粘土板に書かれた物語である。なお、ひとえに楔形文字といっても、何種類もの文字体系がある。アッカド楔形文字の解読は、イランにあるベヒストゥン碑文がロゼッタ石の役割を果たした。

インダス文明の出土品の中では、牛などの四足動物が描かれた印章が有名であろう。そこに記されている象形文字のインダス文字が、ハッパ語を書いていると考えられているが、未判読である。全部で四〇〇種以上の字母があるが、パラレルテキストも見つからず、長文資料もなく、詳細は分かっていない。

中国文明には、ご存じ、漢文を書き表すために用いられた漢字があった。漢字の字形の成り立ちには四つの原理（指示・象形・形声・会意）があり、上の三文明の文字体系同様、象形文字が含まれている。

いや、ちょっと待ってほしい。さらりと流したが、疑問がある。三番目の、インダス文字。これは果たして、音声言語を書き写すために用いられる「文字」なのであろうか。文字なら何故、長文が出土しないのだろうか。インダス最長の文ですら、たった一七字で構成されている。もしもある程度の数の者が理解できる文字を持っていたとしたら、誰かが文章を綴っていてもおかしくないのに、である。筆記具も見つかっていない。土葬文化だが人名を記した墓標もない。インダス文明には文字がなかった可能性がある。

文明のゆりかごの中には他にも、文字を持っていたメソアメリカ文明がある。アンデス文明には文字こそなかったが、キープ（結縄）という記録手段があった。論拠の稀薄な共通点を列挙して「旧世界」の大河文明を恣意的に束ねるのではなく、グローバルな文明揺籃期の概念を受け入れるためにも、いっそインダス文字には文字でない記号であってほしい。

（吉岡 乾）